

# バート語の時制・相の構造の思想

skurlavenija.mavija

## 経緯

筆者はバートの動詞の用法を学ぶ中で、特に[終止詞/過去分詞/未来分詞で時制と相を表示するところ](#)で混乱していた。[j.v.氏のメモ](#)をよく読むと当たり前の処理をしているのだが、正直ごちゃごちゃしていたので読むのが面倒という感情がある。そこで見やすく記述を開くことを試みる。

## 目的

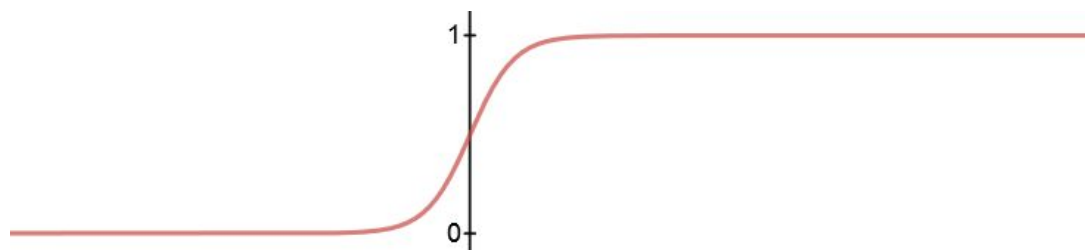
バート語の動詞は動作動詞/瞬間動詞/状態動詞の3つに大別され、それぞれ終止詞/過去分詞/未来分詞で時制や相を表示する方法が異なる。そのような差異が生まれるのはわかってしまえば当たり前ののだが、わからないと正気の沙汰とは思えないので、書く。

## 動詞の分類

上で「動作動詞/瞬間動詞/状態動詞の3つに大別」されると書いた。具体的には大まかに以下のように分類される。説明に入る前に、動詞というものが意味で「世界の状態」の変化を含意するものであることに注意する。例えばaccú!「書く」はあるものが「書かれていない状態」から「書かれた状態」への変化を含意する。以下ではしばしば変化前の状態を0、変化後の状態を1として模式的に表す。

- 動作動詞 (e.g. accú!「書く」)

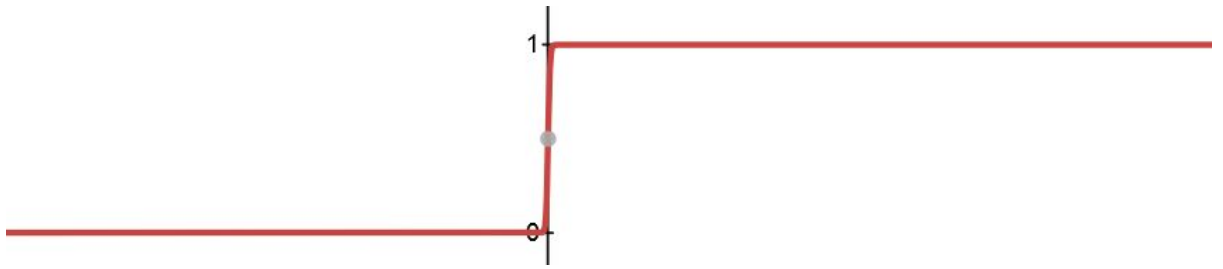
変化の過程が時間的幅を伴うものとして意識されるような動詞を指す。別の言葉で言えば「変化の途中」が意識されるような動詞と言える。accú!の例で言えば「文字が書きかけの状態」は想像されるし、「書く」という動作自体がそのような状態を経由せざるをえないことは想像に難くない。この種の状態の変化を次の図によって模式的に表す。



- 瞬間動詞 (e.g. bhárú!「風が吹く」)

変化の過程が時間的幅を伴わないものとして意識されるような動詞を指す。bhárú!の例で言えば「吹きかけの風」といったものは一般に意識されないであろう。しかし、「風が吹いた瞬間」自体は容易に意識される。この種の状態の変化を次の図に

よって模式的に表す。



- 状態動詞 (e.g. bhárú| 「風が吹いている」)  
変化の過程が時間的幅に関係なくさほど意識されないような動詞を指す。bhárú|の例で言えば、確かにどこかの時点で風が吹いたから「風が吹いている」という状態が実現されるのであるが、しかし「風が吹いている」という言明をしたいのであって別にそれをもたらした何らかの時点というのがどうでもいい、ということはある。この種の状態の変化を次の図によって模式的に表す。  
(図)

## 終止詞/過去分詞/未来分詞の機能

上の3つの図において状態の変化がy軸と曲線の交点の周辺で起こっていることに注意する。終止詞はこの交点が現在に相当すること、過去分詞は交点が過去に相当すること、未来分詞は交点が未来に相当することを表す。但し状態動詞は具体的な交点を意識しない表現であったから、状態動詞の終止詞は有意味でないことに注意する。

## hem/- (a)bháp-の機能

動詞変化に登場するhemおよび-(a)bháp-の機能を記述する。これらは過去分詞および未来分詞に見られる標識であり、終止詞では見られない。

- hem  
過去分詞/未来分詞が表す時点を「y軸との交点」でなく「状態が1となった瞬間」に変更する。要は完了相マーカである。
- -(a)bháp-  
例えば過去分詞の情報を「考えている過去の時点がy軸との交点/状態が1となった瞬間である」から「今考えている過去の時点より少し前の時点がy軸との交点/状態が1となった瞬間である」と変更するものである。つまり大過去である。同様に未来分詞については前未来として機能する。